

部員各位

平成 27 年 10 月 24 日
政治経済学部 1 年 飯村大介

「民間防衛」
～あらゆる危険から身を守る：スイス政府編～

目次

1. はじめに
2. 民間防衛とは
3. 背景
4. この本の構成
5. 本の抜粋
6. おわりに―読書会を通じて伝えたかったこと―

1、はじめに



↑「自由と民主主義のための学生緊急行動」、通称 SEALD s の活動風景とロゴマーク¹



現在、安保法制のデモ活動に代表されるように多くの国民の間に平和に対する意識が高まっていて、その自らの意見を発信する人も増えています。

しかし、日本をとりまく国際状況は刻一刻と変化していて常に私たちはその変化に対応しなければなりません。安全保障に関しては、いかに崇高な理想や考えを持っていても、実際に国防を果たすという結果が伴わなければ意味がないのです。ゆえに現実に即した政策、制度が必要になります。

日本とスイスはともに侵略戦争を放棄した国として大きな共通点がありますが、平和への考え方や、努力に大きな違いがあるように思われます。スイスの国防意識をよく示しているこの本を紹介することで、真の平和を作るための手がかりになると私は考えます。皆さんもこの本を読んで、真の平和とは何なのか

¹活動風景出典：しんぶん赤旗 http://www.jcp.or.jp/akahata/aik15/2015-09-16/2015091615_01_1.html
ロゴマーク出典：<http://blog.goo.ne.jp/koube-69/e/f21180c9175fd8591aec8a86e02507e0>

を考えてみましょう。

2、民間防衛とは



↑民間防衛を表す国際的な特殊標章²

民間防衛とは、武力紛争等の緊急事態において、市民によって国民の生命およびインフラや公共施設、産業などの財産を守り、速やかな救助、復旧によって被害を最小化する諸活動のことを言います。日本では「国民保護」とよばれていて、「国民保護サイレン」は有名です。

3、背景

徹底的に武装中立を目指しているスイスは、非常に国防意識が高い国として知られています。

その高い国防意識を示す、あるエピソードがあります。冷戦時代の 1968 年におこったソ連のチェコ侵攻をきっかけに冷戦が現実の戦争につながるリスクを感じたスイス政府が、「民間防衛」と題された本を 1969 年に各家庭に約 260 万部を無償で提供したのです。このときに配布された書籍が翻訳されたものが、今回取り上げる「民間防衛」になります。

現在、日本国内で市販されている「民間防衛」は 1980 年台までの冷戦に基づいた本であるため、現在のスイス国内で同書が使われることはありません。また、現代の科学技術や戦略、知識からすると現実にそぐわない例や極端な例も存在するのでこの本の知識すべてをそのまま活用することはできません。しかし、それはこの本がまったく無意味だということを意味してはいないのです。むしろ、昔の本と称されている「民間防衛」が現代にまで伝わっていることから、この本が現在の防衛意識に示唆を与えてくれることを証明しています。

4、この本の構成

この本は大きく分けて主に 5 章の章からなっています。

1 章のテーマは平和と愛国です。

ここでは、平和とはどういうものか、平時において平和を維持するためにはどういったことが必要かということが書かれています。また、スイスというものが「いかに守るに値する国か」という一種の愛国教育に近いものも書かれています。スイス政府も愛国心教育を重視したらしく、この部分に 30 ページ近くのページが割かれています。

2 章のテーマは防衛方法です。

²出典：Wikipedia 「民間防衛」
<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%B0%91%E9%96%93%E9%98%B2%E8%A1%9B>

ここでは実際に戦争によって国土が攻撃されたときに起こりうるさまざまな事態についてマニュアル式に対処法を掲載しています。ざっと例をあげるだけでも食料、燃料の配給制にはじまり、食料の備蓄、民間防衛組織の構築、役割分担、火災、建物倒壊による救助、避難方法、生物兵器、核兵器への対処法などが示されており、その内容は具体的かつ多岐にわたっています。本の中で一番多くのページが割かれているところです。非常に詳細なマニュアルでありますので、今回の勉強会では取り扱いませんでした。

3章のテーマは冷戦です。

名指しこそ避けてはいますが、ここで仮定されている大国間の戦争は間違いなく米ソ冷戦です。ここでは、もし仮にアメリカとソ連が戦争を始めたら、それにともなって、国際状況、国内状況がどう変化するかを取り扱っています。大国からの政治的圧力など、目に見えない圧力や宣伝工作への対処法に重点が置かれています。

そして、一番重要なのは第4章であります。

2章と3章は、喫緊の具体的な有事を想定したものでした。しかし第4章は少し毛色が違います。4章で扱うのは「未来」の戦争です。スイス政府は、これからの戦争はスパイ活動や宣伝活動による情報戦、心理戦になると読み、スパイや、策略、宣伝に対応する方策が徹底的に書かれています。

2章、3章で述べられていることは「仮に大国間で戦争が勃発したら」という、言ってみればもしもの世界のことであり、内容的にも、時代的にも確実にマッチするものではありませんでした。しかし、この章で述べられていることは現代の戦争の様相にそのまま当てはまるので、非常に参考にするべき点が多いのです。核兵器が現実存在する以上、武力を伴う戦争はなかなかできません。だからこそ、心理戦でいかに敵国を侵略もしくは同調させるかが重要になってきます。スイス政府はこのような事態を想定した上で、心理的侵略とそれに対する対抗手段をこの章の根幹に据えたのです。

そして、この本の最後には、残念ながら敵の心理戦に破れてスイスが分裂してしまい侵略されてしまったときに、どのように抵抗運動を行うかが書かれています、戦争におけるあらゆる可能性に対応するというスイス政府の姿勢が貫かれています。

本日の読書会は、1章、3章、4章から重要な部分を抜粋し、それに解説を加えていくという形で進行していきたいと思えます。

また、各抜粋記事の下にメモ欄を設けましたので、お使いください。

5、 本の抜粋と解説

1章

・12 ページ

「スイスは侵略を行うなどという夢を決して持つてはいない。しかし、生き抜くことを望んでいる。スイスは、どの隣国の権利も尊重する。しかし、隣国によって踏みにじられることは断じて欲しない。」

・14 ページ

「常識のあるスイス国民は、わが国の諸制度が、人間の作るあらゆるものと同様に、完全ではないが、安定しており、人間を尊重していることを、認めざるを得ない。」

「社会福祉の面では大きな進歩が見受けられる。貧しい人々、身体障害者、老人は国家の援助を受け、この援助も常に改善されつつある。連邦制度は国民を守っている。民主主義は正常にその機能を発揮している。すべての人々は一般教育を受けられる。このように基本的権利がよく保障されている国がほかに数多く見られるだろうか。ゆえに、わが祖国は、わが国民が十分に愛情を注ぎ奉仕する価値がある。」

「一国が、国民をその国に強くつなぎとめるのは、その国の法律がどれだけ人道的であるかによるのである。わが国と同じくらい魅力のある風景は、世界中いたるところにある。しかし、わが国の法律や制度は、われわれに則して作られたものである。われわれがわが国で、どこよりも幸せに感ずるのは、このわれわれの法律や制度のおかげである。われわれが遺産として残すこの家の屋根の下で、われわれの子孫が満足する生活を送れるようにするためには、みんながこの家を常に、より人間的なものにするように働く必要がある。」

「平和と自由は、一度それが確保されたからといって永遠に続くものではない国民各自が、戦争のショックを被る覚悟をしておかなければならない。その心の用意なくして不意打ちを受けると、悲劇的な破局を迎えることになってしまう。わが国では戦争はない、と断定してしまうのは軽率であり大変な災難をもたらしかねない。」

3 章

・ 175 ページ

「敵は、われわれの内部における抵抗力を挫折させるための努力をしている。わが国民に偽りの期待を与えて欺こうとする。われわれをスパイし、わが国政府に反対する世論をあおり、われわれ制度を批判し、時には脅かし、取り入ろうとする。われわれの批判精神、判断力は厳しい試練にさらされている。われわれを取り巻く偽りの網の中から、絶え間なく真実を選び出さなければならない。」

われわれに提供される偽りの情報や、われわれの指導者に対する悪口を、十分に警戒しなくてはならない。国際情勢も悪意あるやり方でわれわれの前に示されることがある。われわれの義務は、断固たる態度をとり、うそを言いふらさないことである。新聞、テレビ、ラジオの義務は、客観的に報道することである。それによってのみ真実が取り戻される。」

・ 227 ページ

「戦争のもうひとつの様相は、それが目に見えないものであり、偽装されているものであるだけに、いっそう危険である。また、それは国外から来るようには見えない。カムフラージュされて、さまざまの姿で、こっそりと国の中に忍び込んでくるのである。そして、われわれのあらゆる制度、生活様式をひっくり返そうとする。このやり方は、最初は誰にも不安を起させないように、注意深く前進してくる。その勝利は血なまぐさくない。そして、多くの場合、暴力を用いなくて目的を達する。これに対してもしっかりと身を守ることが必要となる。」

我々は絶えず警戒を怠ってはならない。この方法による戦争に勝つ道は、武器や軍隊の力によってではなく、われわれの道徳的な力、抵抗の意思にほかならない。」

※227 ページ分

4 章

「敵はわれわれの抵抗意思をくじこうとする。そして美しい仮面をかぶった誘惑の言葉をならべる。」

核武装反対！それはスイスにふさわしくない！

農民たち！装甲車を諸君の土地に入れさせるな！

軍事費削減のためのイニシアチブを！これらに要する多額の金を、すべて我々は大衆の家を建てるため、各人に休暇を与えるため、不遇者の年金を上げるため、税金を安くするため、労働時間を減らすために使わなければならない。よりよき未来に賛成！

平和、平和、平和を！

汝、殺すなかれ！

婦人たちは戦争に反対する運動を行わなければならない！

—武力を使わない戦争方法 略図—

第一段階 工作員を政府の中枢に送り込む。

第二段階 宣伝工作。メディアを掌握して大衆の意識を操作する。

第三段階 教育現場に浸透し「国家意識」を破壊する。

第四段階 抵抗意思を徐々に破壊し、平和や人類愛をプロパガンダとして利用する。

第五段階 テレビ局などの宣伝メディアを利用して、自分で考える力を奪っていく。

最終段階 ターゲットとする国の民衆が、無抵抗で腑抜けになったときに大量植民する。

6、 おわりに―読書会を通じて伝えたかったこと―

日本では軍事というとすぐに右だ、好戦的だと二項対立的な考え方に持っていく風潮が存在する気がします。しかし本来、軍事というものは国防のために存在し、そこには平和という普遍の考えが存在します。本来、右も左も存在しないはずなのです。

このように世論が分裂している状況は、先ほど述べたように、敵の宣伝工作による可能性もあるのです。国防なくして、社会福祉もありえないが、社会福祉なくして国防もありえない。この二つは車輪の両輪のようなものであります。これも左翼、右翼と呼ばれる人たちはお互いに国防のほうが大事だ、社会福祉のほうが大事だと本質的な部分のつながりを見ずに考えている光景が見られます。より本質的なところを見てすべての国民が分裂せずに団結することを深く望んでいます、それが平和への必要条件なのです。

我々がスイスという国を平和愛好国としてみるとき、果たしてスイス国民の平和を守るための努力と負担に目を向けているのでしょうか。スイスは具体的な戦争の脅威にはさらされていません。しかし現在もスイス国民は、非常に高い国防意識を持ち、戦争の危機に対処しうるだけの制度を維持してきました。そうすることで平和を持続させてきたのです。

それに対して、日本はどうでしょうか。日本は戦争の脅威だけでなく、あらゆる自然災害や、おこりうる事故に対して、場当たり的な対処しかしていないように感じます。将来起こりうる危険にはまったく無頓着なのです。

果たして日本人は、どのように平和を守るかという手段について、現実的なものを想定しているのでしょうか。何もせずにもものを得ることはできない、その代償を理解して支払う覚悟が果たしてできているのでしょうか。そして、平和教育という名の下で行われている教育は、正しいのでしょうか。この本を読むだけで、さまざまな疑問がわいてきます。是非とも皆さんにも本書を実際に読んでもらい、自分なりの問いを発見してほしいと思います。

さきほども述べたとおり、日本は二度と侵略戦争をしないと誓い、平和に徹することを目標としてきました。侵略放棄という点で、日本は、永世中立国として侵略戦争を放棄したスイスと、同じ立場にあります。しかし、その世論はあまりにも違う。一方では平時から2年分の必要物資をそろえ、24時間以内に50万の軍隊が動員可能である状態を作り出しています。しかし他方では、軍隊を持つことは民主主義や平和を脅かすのではと議論されている状況です。同じようでまったく違う両者の国を見比べることで理解できることは、きっと多いに違いありません。